

ムスリムである／ムスリムになる

——バンングラデシュにおけるアイデンティティー
の表出・確認・(再)創造——

高 田 峰 夫

(受付 1997年10月27日)

はじめに

バンングラデシュとは、ベンガル語で「ベンガル(人)の国」の意である。現在のバンングラデシュでは総人口のほぼ99%を、言語的・文化的共通性を基盤とした、いわゆるベンガル人が占めるとされる。そして、この「ベンガル人」の中身は、ある場合には自明のこととして、ある場合にはあえてそれを不問に付す形で、いずれにしても問われることのないまま、一般の人々も研究者もこの「ベンガル人」という語を用いて、これらの人々について語ってきたのである。

他方、そうした言葉の内実の問題とは別に、いくつかの動かし難い事実が存在することを認めないわけにはいかない。すなわち、ひとくちにベンガル人と言っても、通常理解される限りの意味においてであれば、バンングラデシュの領域を超えて広くインドの西ベンガル州に、さらにはその外にまで分布していること、宗教面から見た場合、少数の例外を除けば、大きくムスリム(イスラーム教徒)とヒンドゥー教徒に分れること、バンングラデシュに限って言えば、その約9割はムスリムであること、等である。さらに、近年バンングラデシュではムスリムたちがムスリム意識を強めつつあり、人口上の圧倒的な優位を背景に、たとえ公然とした形ではないにせよ、同国内ではムスリムが「ベンガル人」と言えば事実上バンングラデシュ・ムスリムのことだ、とする傾向が見られるようになってきている。その歴史的な経緯とそれをめぐる問題については、すでに概略を論じた〔高田 1996、

1997a]。

本稿では、現在のバングラデシュに範囲を限定して、ムスリムたちがいかに自らのアイデンティティーを表出し、それを相互に確認し、その結果として自分たちのアイデンティティー意識を新たに（改めて）創造しているのか、検討してみたい。検討の素材としては、新聞雑誌の記事に現れた言語表現を含む様々な行動や出来事、及び図像表現を取り上げる。

I. 報道の中のイスラームとその背景

1. 原理主義の「突出」

最近のバングラデシュでは、しばしばモスジッドが政治活動の場となっている。そうした動きは良識的なイスラーム指導者の間でも問題視されるほど広がっているようである。あるモオラナ（イスラームに造詣が深い人に対する敬称）は次のように指摘する。

「バングラデシュでも、聖なるイスラームのスローガンをもって、いくつかの政党はモスジッドを自分たちの政治活動のセンターと化してきている。多くのモスジッドで間々見かけるのは、イマーム（イスラームの導師）ないしはその指名を受けた人が、オワージ（聖句の引用朗読ないし説教）またはトフォシール（詳細説明）などの名目で、政治的見解を表明するのである」¹⁾。

しかも、あろうことか国立モスジッドである *Bāytul Mokārrām* がその最大の拠点となっているのである。

「例として国立モスジッドである *Bāytul Mokārrām* のカティブ（金曜

1) *Maolānā Ābdul Āuwāl*, “*Masjidake rājanoitik tataparātā mukta karār dābi prasange*”, *Janakanta* 紙, 1996年12月28日論説。なお、本稿においては、アラビア語やペルシャ語起源の用語でバングラデシュにおいて一般的に用いられ、通常ベンガル語で表記されているものについては、片仮名表記とする。理由は、その本来の綴りと発音がバングラデシュにおいてそのまま維持されているわけではないこと、にもかかわらず、バングラデシュのムスリムたちはベンガル語の綴りとそれに従った発音でそれらの語とその内容を理解していることによる。

日の集団礼拝の導師) モオラナ・オバイドゥル・ホクのこと言及してみよう。ほとんどいつも、彼は政党の支援で宗教の名の下に開催される様々な集会や記者会見において、政治的見解を述べている。彼のこうした見解を取り上げて、新聞や雑誌では批判や擁護の議論がなされるのである²⁾。

こうした動きの中では、しばしば極端な主張がなされる。独立戦争の直前から最中にかけてパキスタンの側に付いたイスラーム保守派・過激派の人々が盛んに行っていた主張、「独立戦争の闘士たちは、犯罪者であり、ヒンドゥーの軍隊であり、インドの盗人どもである」云々が、再び姿を変えて現れるようになってきている³⁾。

そうした流れと呼応するかのようになり、元々イスラーム原理主義を標榜する政党であるイスラーム協会 (Jamaat-e-Islami) の中には、さらに強硬な主張をするリーダーまで台頭するようになってきている。同党のモオラナ・アブドゥル・ジャッバルは、他のイスラーム政党を「イスラームの名で、そのふりをしているだけだ」と切り捨て、「ムスリムはアッラー以外いかなる人をも徹頭徹尾信ずることはできない」、だから「私は民主主義を尊重しない。(この) 国で女性首相を尊重しない」と言い切る⁴⁾。何ともあきれたことだが、こうした主張を歓迎する向きが一部にあることも確かである。しかし、こうした動きは一部の原理主義者の「突出」にすぎぬ、と片付けて良いものであろうか。その判断のためには、もう少し別の側面を見てみる必要がある。

2) 注1に同じ。

3) 注1の文章からの引用。

4) *‘Āmi ganatantra māni nā, mahilā pradhānamantrī o māni nā — Maolānā Jābbār*”, *Sangbād* 紙, 1997年1月7日。この発言は、1991年以来、政権は交替したものの、2代連続して同国の首相が女性である状況を前提にしたものであることは言うまでもない。

2. 一般大衆の中におけるイスラームの浸透

バングラデシュの国語であるベンガル語の新聞雑誌には、少なくとも我々の目には、奇妙に思えるような事件がしばしば報道される⁵⁾。もちろん、その一部は人間がいる所であれば世界中でどこにでも起こりうる意味での異常な事件であるのだが、別の一部にはそれでは理解し難い事件が報じられることがある。以下に、若干そうした例を見てみよう。

事例1：同国北西部のボグラ県のボグラ市から約40 kmばかり離れた、とある村で起きた事件。詳細はかなり入り組んでいるが⁶⁾、概略をかいつまんで言うと次のようになろう。日雇い農業労働者のAが妻と口論になり、ついにカッとなってタラク（離婚）だ、と言ってしまった。だが、二人はその後すぐに仲直りしたので、そのままであればタラクの件はウヤムヤになるはずだった。ところが、ケンカ騒ぎが激しかったので、近所の人が大勢のぞきに来ていて、その中にモオラナが1人いた。彼は、一度口に出してタラクだと言った以上、シャリーア（イスラーム法）に則ってその手続きが進められるべきだとして、タラクは成立したとのフォトワ（シャリーアに則った法令）を出してしまった。困ったAはユニオン議長（行政村のいわば村長に当る人）にタラクの無効を確認してもらったが、それでもフォトワは撤回されない。あれこれ手を尽くすうちに、逆にAとその手伝いをした友人は村

5) 同国には英字の新聞雑誌も多いが、そちらではめったにそうした報道はされない。これは、一つには、援助や外交関係者の目に触れやすい英字媒体には外聞が悪いから載せたくないとの報道関係者の意向が働いているからであろう。他方、ベンガル語媒体の読者と英語媒体の読者では、同じバングラデシュ国民であっても、宗教や民族の違いとは別に、そもそも階層が異なることを考えないわけにはいかない。この問題は複雑であり、十分な検討を要するが、これまでまともに取り上げられたことはないようだ。これに関連して、簡単だが興味深い現状報告に安藤 [1996] がある。

6) 事件の詳細が、しばしば全てこと細かく、何から何まで（村名や個人名まで実名で）報じられるところがベンガル語紙誌の特徴になっている。英字紙誌では事件の報道があっても、なかなか詳細は分からないことが多い。

八分にされてしまった⁷⁾。

事例2：これも、ごくかいつまんでまとめる。ボルグナ県の中央郡のある村で、若妻Bが、夫Cがあまりに過大な持参金を請求するので、そのような請求は法律で禁じられている持参金強要に当たるとして、夫に対する訴訟を地裁に起こした。その結果、夫Cは持参金請求を諦めたが、逆に村人たちがおさまらない。Cをイマームの所へ連れて行き、シャリーシュ（シャリーアに則った村裁判）に掛けた。全ての経緯を聞いたイマームは妻Bに対して鞭打ち100回のフォトワを宣告し、それはすぐに実施された⁸⁾。

事例3：イスラーム協会の学生組織の跳梁に手を焼いた国立ラッシャヒ大学の学生寮長のD博士が、同大学の副総長（事実上の学長）E博士に助力を求めたところ、副総長は英語で“Only God can help you”と言っただけだった、とD博士自ら記者に明した。記者は、それをベンガル語に直訳して“*Kebal Āllāh āpanāke sāhājya karate pāren*”と題して報じた⁹⁾。

事例4：ある投書。「数日前、雑誌や様々な告知組織を通じて、100%ハラル（シャリーアにかなったもの・事柄）の石鹸という宣伝を見かけた。（中略）。これまで我々はハラム（シャリーアに則らず、ムスリムには禁止されるもの・事柄）の石鹸を使ってきたということなのか？（後略）」¹⁰⁾。

これらは、いずれも1996年末の時期に限定して、2紙から目に付いた記事のうちのいくつかを拾いだしたものであって、これと同種の記事は、それ以前にも、そして今でも多々目にすることができる。また、言うまでも

7) “*Bagrār Nandīgrāme ājī o fatowābājī cholacchei…: prachalit āin kabe pongcchabe*”, *Janakantha* 紙1996年10月30日。

8) “*Fatowābājī: swām īr joutuker māmālā dāyer karāy 1-sha ghā dorarā*”, *Janakantha* 紙1996年11月28日。

9) *Sangbād* 紙1996年10月28日。

10) *Sangbād* 紙1996年10月31日の投書から。

なく、実際に発生している事件の数はこうして報道される事件の数をはるかに上回っているはずである。それゆえ、以下で展開する議論は、決して極めて限定された特殊事例についての議論ではないことに留意していただきたい。

さて、これらの事件には共通した点があることに気づかれたであろうか。すなわち、いずれもイスラームの浸透を前提としなくては理解し難いことにある。

事例1の場合、元はと言えば、どこにでもある単なる夫婦喧嘩にすぎないから、そのままなら「犬も食わない」はずであった。ところが、そこに頑固なモオラナが居合せたことから事態は思いもよらない方向に展開する。ここまでこじれるからには、A氏とモオラナとの間に以前から何等かの確執があったのかもしれないが、それははっきりしない。明らかなのは、フォトワが出された結果、A氏とその友人が村八分にされてしまった、ということである。A氏たちが村八分になっているということは、言い換えれば、村人たちがモオラナの言い分を認めて、もしくは少なくとも彼の権威に従って、連帯してA氏たちを排除する方向で行動していることになる。しかし、バングラデシュの村部においてイマーム（ここではモオラナの敬称で呼ばれている）は確かに村の権力者層の一部を形成する傾向にあるとはいえ、日常的な事柄であれば、村を上回る単位であるユニオンの長であり地域の最大の実力者でもあるユニオン議長の出した裁定に逆らうほどの権威は持っていない。それにも関わらずモオラナが自分の出したフォトワを撤回せず、しかも彼の主張が村人たちに認められているとすれば、それは彼の主張の根拠となっているもの、すなわちシャリーアとその解釈が村人たちに広く共有され支持されているからだ、と考える方が自然ではないだろうか。

事例2も同様である。本来あくまでもB・C夫婦間（せいぜいその双方の親族間）の問題であり、法律で禁止されているためもあって決して肯定的に見られているわけでもない持参金の強要に対する訴訟である。しかも、訴訟の結果、訴えられた夫は強要を諦めたのであるから、とりあえずは一

件落着となるはずであった。しかし、それに対して、今度は村人たちがおさまらなくなったことから、話は思わぬ方向に転じて行く。なぜ村人たちはあえて騒ぎだしたのか。最も可能性が高いのは、(実態はしばしば異なるのだが) 少なくとも建前上は夫に従うべき妻が、あろうことか夫に逆らったのみならず、それを村の外の公の場である法廷に持ち出したことが、問題とされたのだろう。その意味では、これは「シャリヴァリ」などとも通じる問題のようにも思え、ここまでは必ずしもイスラームがらみとは言えないのかもしれない¹¹⁾。しかし、そこから様相が変化して行く。法廷の判断に納得しない村人たちは問題の裁決をイマームに求め、それを受けたイマームは(恐らくは公開の) シャリーシュを開き、多分に恣意的なものであれ、シャリーアの解釈に基づきシャリーアで規定された鞭打ちのフォトワを出し、それが村人によって直ちに実行に移されている。ここでは明らかに世俗の法に対してシャリーアが優先している。もちろん、それは村人たちの、恐らくは保守派の有力者たちの考える「正義」に合わせて都合良く解釈されたシャリーアに過ぎないのであろう。それにしても、世俗の法の裁決には納得しない人々が、イマームにシャリーアに基づいた判断を求め、その結果出された裁決にはあっさり従って、すぐさまそれを実行したという事実は残る。この事件を報じた記者も、それを掲載した新聞社の編集部も、後進的な村部の人間がまだこんなことをやっているのは情けない、との姿勢から報道していることは、記事の論調からも明らかである。しかし、こうした事例はちょっと田舎に行けば実は決して稀なものでないことは、筆者の個人的な経験からも確認できるのである。

事例3は以上の2事例とは全く異なるものに思われるかもしれない。それにも関わらず同列に並べたのは理由あってのことである。ここでは2点に注目したい。第1はラッシャヒ大学の事実上の学長で博士号を持つ同国でもトップレベルの知識人のE氏が、学内の問題に何の具体的な対策を取

11) シャリヴァリについては、とりあえず二宮他編 [1982] 所収の諸論文を参照のこと。

る姿勢さえ見せず、助力を求めたD博士に対してあっさりと(それでも一応知識人らしく英語で)“Only God can help you”と言ってしまうことである。これはムスリムがしばしば使う言い訳、場合によっては諦めの言葉「インシャッラー」を英語に置き換えただけであろう。何ともあきれたことだが、それはまたこれを記事にした記者も同じ気持ちだから取り上げたのだろう。しかし、同時に注目したいのは、この記者が副総長の英語の発言中の“God”を“Allah”に置き換えた上で、あえて「インシャッラー」とせず、ベンガル語の表現で直訳して見出しとしていることである。ここには、バングラデシュのコンテクストに溶け込み、そこにしっくりとなじんだイスラームの姿があると言えないだろうか。

事例4では、場面が都会に転ずる。近年の経済開放政策と消費ブームの中で、次々に売り出される新商品の数々。少しでも先行商品との差異を強調しようとして、宣伝にも工夫が凝らされる。マジョリティーがムスリムであることを十分に意識して、そのムスリム意識に訴えかける狙いから「100%ハラール石鹸」とした企業の狙いは、その意味では的を得ていた。だが、同じムスリム意識は、それを全く逆の方向から受け止める。わざわざ100%ハラールと打ち出すからには、今までは100%ハラールではなかったのではないのか。すると我々はハラムの石鹸を使っていたことになる。とんでもないことだ、これは追及しないわけにはいかないぞ、というわけである。実際、同様の疑問を抱いた読者が多数いたらしく、各紙にはこの投書とほぼ同じ頃、この問題を追及する記事が現れた。ここでも2つの点が注目される。すなわち、一方で、ムスリムの人々の間にはムスリムとしての意識が強く広がっていると広告主が想定していることであり、他方、その想定を上回るほど人々のムスリムとしての意識は強いことが図らずも実証されてしまったことである。また、新聞の読者の中心となっているのは都市居住の知識人や学生、勤労者、ビジネスマン、商店主などである。つまり、事例1や事例2で見たような村部の、記者たちから見れば後進的とも思える人々ばかりではなく、それとは異なる形ではあれ、都市住人たちの間でも

実はムスリム意識は広く深く浸透していることが、この事例から垣間見られるとは言えないだろうか。

事例1～4に見られるイスラームの浸透とムスリム意識の広がりとは、前節で見たようないわゆるイスラーム原理主義とは全く質を異にするものである。そうした意識がどのように維持・再生産、あるいは再形成されているのか、次にその一端を明らかにしてみたい¹²⁾。

3. 宗教教育とそれがもたらすもの

バングラデシュの場合、都市と村部とを問わず、多くのムスリムは就学以前にモクトブに通う。モクトブとは、マドラサのような公的な宗教学校ではなく、町や村のモスジッドで、多くの場合イマームが師匠となって早朝ないし夕方に開かれる、一種の寺小屋式コーラン学校である。小学校入学率（就学率ではない）がようやく7割前後になってきたと統計局は報ずるが、依然として多数の子供たちは学校に通っていないのはまぎれもない事実である。しかし、それらの子供たちも、その多くはモクトブにだけは通うのが普通である。特に少女の場合にモクトブでの勉強は欠かせない。成長して結婚話が持ち上がった時、花嫁としての適性を検証されるのだが、その際の夫方の最大の関心事は宗教心があるかどうかである。具体的にはイスラームについての知識の有無を、コーランの代表的な一節を暗唱させることで確認する。モクトブに通うことはその準備の意味があるからであって、仮にモクトブに通わなかった場合には、それに代って母親ないし近親の女性が口伝えで教えることになる。小学校に上がる以前における教育だから、合理的な説明などほとんど不可能である。実際にあちこちのモクトブで「授業」を参観したが、やっていることはどこも同じで、ひたすらコーランの丸暗記であった。ともかく徹底的にたたきこむことが印象的だった。

12) こうしたムスリム意識がどのように形成されてきたかを問うことは必要だが、本稿の主題とはまた別の問題であり、その一部は前稿 [高田 1996, 1997a] で論じた。

この結果、子供たちは就学以前からコーランに親しんでゆくことになり、コーランは半ば無意識的に内在化してゆく¹³⁾。

小学校に入ると、カリキュラムの中に宗教の時間がある。宗教の時間については、宗教教育そのものは必要であるとしても、その教育の内容が問題であると指摘する声はムスリム知識人の間にも以前からある。

「我々の国では心優しい子供たちが学校に入ると、その時からそれらの何も分からぬ子供たちは、初等教育を授けると平行して、宗教の盲信的な狂信や妄信、他宗教嫌悪の教育を教え込まれる。(中略)。我々は先進世界のように宗教を棚上げにすることはできないのだろうか?」¹⁴⁾

後半の提言は提言としてそのままおくとして、問題はその前である。恐らく比較的にリベラルなムスリム知識人である投稿者の目に、現在の宗教教育の実態はかなり歪んだものと映っているのは明らかである。

しかも、宗教の時間には、建前としては各宗教(イスラーム以外にも、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教)それぞれ別の教育をすることになっているが、実際にはその通りになっていないことが多い。

「我が国では中等教育まで、通常、ヒンドゥー教、イスラーム教を教えることになっている。しかし、ほとんど全ての学校にイスラームを教えるための宗教教師がいるのに、大部分の学校にはヒンドゥー教を教えるためのヒンドゥー教師はいないのである。(後略)」¹⁵⁾

13) 内在化の程度を示すエピソードがあるので紹介しておく。筆者の友人(日本人)が村で調査をしていた時に、村の小さな集会所の一画を借りて寝泊りしていた。そこには、特に仕事もなくブラブラしている青年たちが時々遊びに来て、そのまま泊っていったりもした。ある晩、寝ているとそうした青年の一人がブツブツと寝言を言うので、ジッと聞いているとそれはコーランの一節だった。その青年は普段は全く宗教的でなく、むしろそうしたものを馬鹿にしている風さえあったので、非常に驚いた、という。

14) *Sangbād* 紙1997年1月16日の投書から。やや文章がおかしいが、ほぼ直訳した。

15) *Sangbād* 紙1997年3月20日の投書から。

これはあるヒンドゥー教徒の投稿である¹⁶⁾。もはや説明は必要ではなからう。こうした結果、宗教の時間になると、ムスリム以外の子供たちは外に出て遊ぶことになるか、最悪の場合には教室に留ってイスラームについての話を聞かされることにならざるをえない。

一般の学校の状況はこれで一先ず終えておき、今度はマドラサに目を転じることになろう。もちろん、多くのマドラサでは他宗教にも配慮した寛容かつ厳密な教育が行なわれているはずである。少なくともそうであると願いたい。しかし、マドラサによっては状況は異なるようで、一部には子供たちを半ば奴隷労働させている例さえ報告されている。なぜそのようなことが可能なのかというと、多くの保護者がマドラサに子供たちを預けておけば間違いないと信じ込んでいるからである。マドラサの教師に対する人々の態度について、ある論説は次のように厳しい指摘を行なっている。

「マドラサのモウロビ（イスラーム教について知識のある人のことで、この場合はマドラサの教師を指す）氏たちは、以前はモウロビ・シャヘブ（モウロビ氏）と呼ばれたものだが、今ではフズール（特別の権威を持ったお方、閣下にも相当する敬称）と呼ばれている。（中略）。こうしてフズール、フズールと呼ぶことで、我々はフズールたちを全能者、もしくは優越する者としている」¹⁷⁾

この結果、マドラサの中においては、かなり偏った主張であっても、教師がそれを主張する限りそのまま認められてしまう傾向にある。特にムスリムとヒンドゥーのコミュナルな関係に関連した事柄では、そうした傾向が顕著なようであり、穏健派の目には困ったことだとしてニュースに取り上げられる場合もある。

16) 投稿者や記事・評論の筆者がムスリムであるかヒンドゥー教徒であるか、それとも他の宗教コミュニティに属する者であるかは、実名が記されていれば、そこからおおよそ判断することが可能である。

17) *Ānowārā Soiyad Haq, "Behudā adhyakka o burabak obhibhābak", Sangbād* 紙, 1997年1月8日の論説。

「パルバティブール郡には公認されたマドラサが28ある。(中略)。授業が始まる前には、整列して一斉に声を揃えて国歌を歌うように、との通達が政府から出ているのに、政府財政で運営されている同郡の大部分のマドラサは、その通達を守っていない。(中略)。何と独立記念日や戦勝記念日にさえ国歌は無視されている」¹⁸⁾

なぜ国歌を歌わないのか。誰も明確に口に出しはしないが、その理由は容易に想像できる。国歌の作詞をしたのがヒンドゥー教徒のタゴールだから、であろう。果たしてそれを教師たちは子供たちに説明するのだろうか。この記事からそのことは読み取れない。だが、こうした態度は、決してここだけの特殊なものではない。だからこそ国会や一部の国立大学でも同種の「事件」が生ずるのである¹⁹⁾。念のために記しておくが、同国においてタゴールは非常に広く支持されており、タゴールの詩にメロディーをつけたタゴール・ソングは多くの人が愛唱している。にもかかわらず、マドラサを中心とするイスラーム保守派の態度は強硬である。こうした雰囲気の中で教育を受ける子供たちは、どのように育ってゆくのであろうか。

モクトブ、公立小中学校での宗教の時間、マドラサ、これらのいずれもが非常に幼いうちからの宗教(イスラーム)の注入を示唆している。もちろんそのこと自体は決して責められるものではない。しかし、その教え方が問題である。先に引用した良識派のムスリム知識人が言うように「宗教を棚上げする」までは必要ないとしても、せめてもう少し穏健なやり方を取れないものだろうか。

4. イスラームの日常化

どこの国ないし地域であれ、外来の用語が極めて多いことは同じである。ただし、その用いられ方、定着の度合い、定着の仕方などによって、場合

18) “Pārvatīpure adhikāṅgsh mādrāsāy jātīya sangīta paribeshan karā hay nā”, Sangbād 紙1996年12月14日。

19) 高田 [1996, 1997a] 参照。

によってはそれらの用語に注目する必要もあろう。

現在のバングラデシュでは、同じベンガル語とは言っても、かなりバングラデシュ化した言葉が用いられている。ベンガル語を学ぶ者にとって定番とも言える“SAMSAD”（カルカッタで刊行）の辞書は、入門には良くとも、少々深くバングラデシュの社会を理解しようとする、たちまちその限界が目につき始める。新聞や雑誌で目にした見知らぬ単語の意味を知ろうとして辞書を引いても、そもそも載っていないことが多いのである。調べてゆくうちに、それらの多くはアラブ・ペルシャ系統の言葉であることが判明する。新聞の見出しにさえそうした語が多用されていて、とまどうことも間々ある。比較的頼りになる同国の国語・国文学研究所に当るバングラ・アカデミー発行の新しいベンガル語・英語辞書を引いてみると、それぞれの語の起源が記号で記されている。それによって現在のバングラデシュ・ベンガル語には予想以上に多数のアラブ・ペルシャ系統の言葉が入り込んでいることが明らかになる。ページによっては1/3ほどがアラブ・ペルシャ系統の言葉で占められていることを見出し、愕然としたこともある。しかも、この辞書にさえ見出せない単語も多い。その場合には、ベンガル語に取り入れられたアラブ・ペルシャ系統の単語の辞書（綴りも説明も全てベンガル語）で探してみる。それでも見つからない場合にはやっかいである。とりあえずベンガル語の綴りをローマ字化し、次に英語版のイスラーム百科辞典の索引でそれに近い綴りのものを探し、運良く見つけれればそこから意味を調べるしかない。笑い話のようだが、本当なのである。

一般的に使用されている用語の中には、元の意味から転化しているものも多々ある。一例を挙げてみよう。ある新聞記事の見出しにこのような表現があった。「ルフール一味のテロリズムと資金徴収：5つの郡の人々はジンミ (*jimmi*)」²⁰⁾。ルフール一味は暴力集団の固有名詞である。本文は次の

20) *Janakantha* 紙1997年3月25日の記事。

ように始まっている。

「国の西部国境沿いの3県5郡の数十万の人々が今や一つのテロリスト集団の勢力によってジンミの生活を送っている。(後略)」

この文章から、ここでジンミが「捕虜」「人質」のような意味で用いられていることは明らかである。また、これと同様の用法で書かれた記事は毎日のように目にする。ところで、このジンミは元々アラビア語の *dhimmī* をベンガル語に転写表記したものであり、イスラームでは特異な意味を込めて理解される。この語についての解説から主要部分を抜き出してみるとその点が明らかになる。

「イスラーム法では、ムスリム権力と保護 (*dhimmah*) の契約をした人は *dhimmī* と考えられる。(中略)。実際には非ムスリムのみが対象。(中略)。 *dhimmī* たちの法的地位は多くの点でムスリムのそれと同等ではない。(中略)。近代国家の誕生と共に「市民」概念が登場し、表向きは無意味になったが、今でも意識の上では大きな影を投げかけている (ex. パレスチナ紛争)」 [NETTLER 1995]。

恐らく非ムスリムの側の多くの人はこの言葉を聞いても、そしてそれを自ら使うことがあっても、この言葉に含意されている特殊な側面については分からないままであるのだろう。しかし、ムスリムの側ではこの語の本来の意味は十分に意識しているようである。ある新聞記者は、筆者との雑談の中で、どこの国でもマイノリティーは多かれ少なかれ抑圧されるが、それはどうしようもない、という主旨のことを語った後に、バングラデシュのマイノリティーの場合に触れ、「ジンミだから、それ(ある程度抑圧された状態) 以上は望めない」と語った。ここでは明らかにこの語の本来の意味を意識して、しかも筆者がそうした知識を有していることを承知した上で、彼はあえてこの語を使ったのであった。ちなみに、彼が属する新聞社は、リベラルとまではいかないが、比較的穏健な系統なのである。

こうした用語の使用が進むと、場合によってはムスリム以外の読者にははっきりした意味が分からない記事さえ現れる。前バングラデシュ民族主

義党政権末期に、当時の首相カレダ・ジアの不穏当な発言をめぐって国会が紛糾したことがあった。翌日のある新聞の一面には、カレダが左手で賄賂を貯めこむ男（どうやら彼女の次男らしい）をかばいながら、右手で野党議員らしき男に向って“*Beadobī*”と叫んでいる戯画が載った。意味が分からなかったのも、そばにいた仏教徒の知人（バングラデシュ人）に意味をたずねたら、はっきりとは分からないけれど恐らく「無礼な」（ベンガル語で *abhadra*）とか何とかいう意味じゃないか、と言う。いくつかの辞書を引いてみると、おおよそ間違いではない。ただし、“*Adab*”（礼儀）というアラビア語に、否定を表わすペルシャ語の“*be-*”という接頭辞が付き、さらに人を表わすベンガル語の接尾変化“-*ī*”が加わったもので、恐らく「無礼者」に当るだろう。これが戯画の中の唯一の台詞なのだから大変である。しかし、ムスリムの読者にはあっさりと理解できることは、その後何人かの知人に確認した。もっと極端な場合、これに南アジアのムスリム独自の表現が加わる。当然、ベンガル語の辞書を探しても、イスラーム辞典を探しても見つからないから、そうなるも情けないことだが、その意味を推測するだけに留めるか、それともムスリムの知人に口頭で説明をしてもらうかしか手がなくなる。

こうした言葉の面でのイスラームないしムスリム文化の浸透とは別に、行動の面でもイスラームの浸透は徐々に顕著になっている。この夏（1997年）ダッカの某高級ホテルで、ある著名なパキスタンの歴史・考古学者の学術講演会が開かれた。会場は着飾った人々で一杯になった。開会の挨拶の後、バングラデシュはイスラームが国教であるので、正式な開会の印としてモオラナによるコーラン朗唱が行なわれた。招かれた著名なモオラナが登場してコーランの一節を唱句し始めようとするやいなや、上等なサリーで身を飾り立てた来場のご婦人方（この国でも有数の知識人たち）が皆一斉にサリーで頭を覆った。別に誰から注意があったわけでもない。ごく自然に行動していたのだが、期せずしてそれが一致した行動となったのである。例外は、サリーを着ていたものの明らかに外国人と分かる女性ただ一人であった。

別の例を挙げよう。やはりこの夏、ごく親しいムスリムの友人宅で、筆者夫婦と友人夫妻その他何人かが寛いで歓談していた。そこに近くのモスジッドから礼拝の時を知らせるアッザーンが響いてきた。その途端、半ば反射的に友人の夫人はオロナ（飾り布）で頭を覆いながら話を続けた。その仕草があまりにすばやく、あまりに自然であったので驚いたものである。ちなみに、この友人は個人的には真摯なムスリムであるが他人の信仰には寛大であり、また夫人は自ら踊りの教室を開く活動的な女性である。それだけに驚きは大きかったとも言える²¹⁾。

以上、この章で記したことをまとめてみよう。近年のバングラデシュではイスラーム原理主義的な動きがしばしば目につく。しかし一般的には、それは一種の突出した現象にすぎず、多くは宗教には寛容、ないし拘りのない人々であると捉えられている。確かに政治的なイスラーム原理主義運動はそれほど多くの人々の支持を受けているとは言えず、その意味ではこの捉え方は間違いではない。しかし同時に、そのことが人々の宗教心の希薄さを意味するわけではないことに注意する必要がある。むしろ、新聞雑誌などに表われてくる「事件」を通して見ると、都市部と村部とで形は異なるとはいえ、生活の隅々にイスラームが浸透しつつあることが浮び上がってくる。しかも、社会の上層でも、知識人の場合にもそれは確認できる。こうした状況をもたらすものとして、人生の極めて早い段階からの様々な宗教教育が及ぼす影響を考えてみる必要がある。そうして形成されてくるムスリム意識は、日常の言葉使いや振る舞いの中に、さりげなくその自然な内化の深さを垣間見せるのであり、恐らくはそれがまた、彼ら相互の間でムスリム意識を深化させる、言わばフィードバック効果をもたらしているのではないのだろうか。

しかし、宗教教育や個々人の日常の言動ばかりがそうした内化の要因に

21) この問題は、より広くは服装をめぐる問題の一部として把握すべきであろう。

なると考えるのは、やはりあまりに素朴な見方だと言わざるをえないだろう。そこで次章では、異なる視点からこの問題を考えてみることにしたい。

Ⅱ. 図像と分析

1. 大衆伝達と図像

近代化の様々な特徴の一つとして、マスコミ等を含む大衆伝達方法の発達が挙げられることに異論はあるまい²²⁾。映画についての議論から、「大衆伝達の方法が発達するということは、(中略)、新しく、今までよりぐっと広い範囲の人々を受け手にすること」[佐藤 1993:17]との指摘がある。大衆伝達方法の発達と受け手の拡大との相関についての主張であるが、これも認めて良いであろう。

現在のバングラデシュにおいて大衆伝達方法の最たるものと言え、恐らくラジオであり、テレビや映画がそれに続くのではないか²³⁾。都市部を見ているだけでは分からないが、村部ではまだ電気が通っていない所も多い。また、収入に比してテレビ受像機自体の値段がまだまだ高いために、外部の情報はラジオに頼る所が多いのである。他方、テレビの普及はまだまだ限られているとはいえ、都市部を中心に急増する傾向にある上、成人識字率が低いバングラデシュでは音声ばかりでなく映像を伴うテレビの影響力は見過ごせない。ただし、ラジオもテレビも共に国営放送1局だけであり、そのために、その時々政権与党の影響力を直に受けてしまう点が、しばしば問題であると指摘されてきた。図1はある雑誌の表紙に掲載された戯画であるが、同国の政治に少しでも知識がある人が見れば、その意味するところは一目瞭然である。少し変った形の黒いベストは現政権与党のアワ

22) ここで大衆伝達とあえて記すのは、奇をてらったことではなく、以下で論じるように、マスコミ等の公式のチャンネルばかりでなく、漫画、落書き、ビラ、記念碑等々を含めたもっと広い内容を念頭においているからにすぎない。

23) 映画については、その影響力の大きさは想像できるが、分析できるほどの知識を持ち合せていないので、ここではあえて取り上げない。

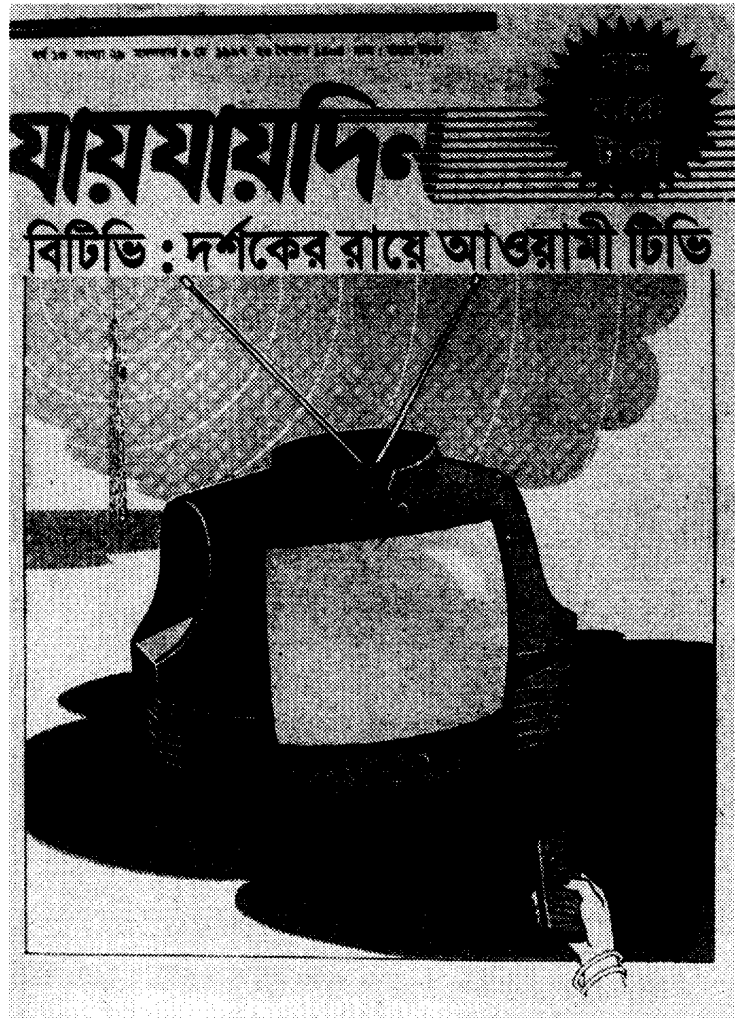


図1

ミ連盟の男性議員が好んで着る一種のユニフォーム（通称ムジブ・コート）であるから、テレビが与党の宣伝媒体になってしまっているとの批判である。ただし、こうした事情はこれまでのどの政党の政権下であってもほぼ同じであった。前・民族主義党（BNP）政権の時代にも、その前のエルシャド政権当時にはエルシャドが電気メディアを政権維持に利用していると批判していたくせに自分たち（BNP）が政権についたら同じことをしているじゃないか、との告発の投書があったことでそれは確認できる²⁴⁾。

しかし、そうした政治性とは別に、現在のバングラデシュのラジオ、テ

24) “Dhaka Courier” 誌，1995年10月20日の投書。

レビには共通の特徴がある。最近の経済自由化政策の結果、町には商品が溢れるようになり、テレビでは次々と華やかな、ラジオでは賑やかなコマーシャルが流されるようになっていく。確かにそれは大きな特徴になっているが、その影でついつい見逃されがちなもの一つの特徴、それは、テレビとラジオのいずれにおいても宗教的な番組や宣伝（番組と番組との間のつなぎ）が繰り返し流されていることである。1日5回のアッザーンの時間（ただし、いずれも放送時間内のみ）に合わせたアッザーンの放送、コーランの朗唱、説教、解説等々。特にテレビのアッザーンの時間には、画面一杯にメッカのカーバ神殿とその回りを礼拝しながら回る人々の姿がずっと映しだされ、それに恐らくはメッカのムアッジン（礼拝の時を「アッラーフ・アクバル……」と大声で人々に告げる係の人）の朗唱するアッザーンが重なる²⁵⁾。その響きは実に神秘的で、ムスリムでない人でも思わず耳を傾けたくなるほどである。こうした音声と映像による一種の「刷り込み」は強力であるが、それが目に見えないだけに見過ごされがちでもある。列車の車内放送でも出発前には必ずコーランの一節が朗読されるが、これも類似の効果を持っているだろう。

テレビ、ラジオとは異なるが、バングラデシュでは新聞雑誌の影響力も無視できない。元々バングラデシュの大部分を含むベンガル地域は、文学的伝統の強い地域であり、知識人、特に詩人に対する社会的な評価は伝統的に高かった（例えば、タゴールやノズルール・イスラム）。言い換えれば、文字および言語表現に関心が高い世界なのである。1993年時点で、新聞（全国紙、地方紙）、雑誌等の定期刊行物の数はベンガル語122、英語15を数えるとされるが〔安藤 1996〕、こうした多数の定期刊行物が出版されていること自体、バングラデシュの人々の文字文化に対する意識の高さを象徴的に示していると言えよう。また、新聞や雑誌を購入するだけの余裕を持つ

25) アッザーンは節をつけて朗唱されるが、テレビで流れるアッザーンは、バングラデシュ各地のモスジッドから聞えるアッザーンとは、明らかに節回しが異なる。

た層が都市部を中心にできてきている上に、地方では以前から官公庁やその出先機関で講読していて、それを皆が回し読みするから、実際の発行数以上に多くの人に読まれていることは間違いない。確かに成人識字率はずっと低いレベルに留ってきたが、近年では徐々にそれも改善されてきており、これまで以上に新聞雑誌等を中心とする印刷メディアの影響力は強まるであろう。

近年の新聞や雑誌の特徴的な点は、紙質の向上とそれに伴った印刷技術の向上、パソコンの急速な普及等により、白黒、カラーともに写真や図版が増えてきたことにある²⁶⁾。そのため、文字が読めない人々にとっても新聞雑誌は魅力的なものになり、引いては影響力も大きく増すことになっている。その証拠に、真っ先にカラー化を推し進め、大胆にカラー写真を取り入れていることで有名な“Janakantha”紙は、町の新聞スタンドに昼頃に行くと売切れの場合が多く、夕方まで売れ残る新聞が多いのに比べると対照的である。また、町の小さな商店や茶店に行くと、それらのカラー写真や図版が切り抜かれて飾りとして壁に張ってあるのをしばしば目にするが、これも人々に対する影響力の大きさを間接的に物語っていると言えよう。

テレビの映像が流れるものであることにより大量の情報を伝えるのに対して、新聞や雑誌の写真や図版はどのような意味を持つのだろうか。写真の発明・普及以前とそれ以後とを比較した場合、「われわれの目が気づくこともなかったディテイル（への注目、その発見）こそ、写真がもたらしたあたらしい経験だ」という指摘がなされているが〔西村 1997:25〕、これとほぼ同じことは、写真をテレビ等のメディアと比較した場合にも言えるだろう。瞬間を切り取り、静止した状態を固定化して呈示することにより、人々はそれを繰り返しじっくりと眺めることが可能になり、その結果、隅々にまで注意を向けることが可能になる。同時に写真は、人々が記憶するために用いる道具ではなく、「記憶の発明」であり〔同：111〕、肖像写真の場

26) 高田〔1997b〕の中で、この問題についてはやや詳しく現状を記しておいた。印刷技術と図版の関係については、「ポンチ絵（カートゥーン）は洗練した印刷技術に依存している」との指摘もあることに注意〔アンダーソン 1995: 233〕。

合で言えば、自己のイメージの流通を容認することによって、結果的に「肥大した自己像をみずから回収する」ことになる、ともされる [同：119]。

具体的な例で考えてみよう。図2は、現首相であるアワミ連盟党首シェイク・ハシナが、各種記念日などの公式のメッセージ（祝詞等）に際して最近好んで用いる肖像写真である。彼女の後ろに映っているのは、独立の中心人物であり初代大統領でもあったシェイク・ムジブル・ラーマン、すなわち暗殺された彼女の父である。ムジブは、通称ボンゴ・ボンドウ（ベンガルの友）と呼ばれ、政治的な評価は分れるとはいえ、少なくとも国民の間での知名度は最も高い人物である。その父と重ね合わせた肖像写真を繰り返し使うことによって、父の知名度とその人気を自分のものとしてゆこう、すなわち人々の間に新たな記憶を発明しようとする彼女の意図は明白であろう。こうしたイメージのあからさまな政治利用には批判する声も多いし、仮に彼女が失政等で追及され、その人気低下した場合、亡父のイメージまでが大きな打撃を受けてその権威と人気は失墜することを懸念



図2

する人もいる²⁷⁾。現在の政治的な状況を考えれば、彼女にとってはなりふり構ってられぬギリギリの選択であったのかもしれないが。

他方、図版や戯画等は、写真と同じように静止しているとはいえ、全く異なる特徴を持っている。写真に比べても、より一層その表現が単純化され、そこに盛りこまれる情報量は格段に減少するが、同時にそのことによって、人々の意識を作者が注目するものに否応なく引き付ける。逆に言えば、写真とは異なり、そこにおいて何が注目の対象となっているかが明確に現れるのである。その結果、「視覚による政治的コミュニケーションで、恐らく漫画（カートゥーン）はたやすく読み解くのに最も適したもの」とされる [アンダーソン 1995: 224]。ただし、写真から漫画や戯画までを含む図像の分析に際しては、その独特の性格にも注意を向けねばならない。すなわち、記念碑や儀礼、漫画、映画、広告等は「一つの政治的コミュニケーションを表現している」のだが、その語りかたは「象徴話法」なので、「その文法は当惑させるものがあり、形式と内容の関係はより顕著で同時に曖昧」になっている。そこでは「コンテクスト (マ) が総て重要」になる、という [アンダーソン 1995: 222-3]。つまり、図像等で何が語られているかを分析し理解するには、その前に様々なコンテクスト、その時点での政治、経済、社会、文化等々の状況を把握する必要があるということだろう。

2. 図像読解

前節でまとめた写真や図像の特性を念頭に置いた上で、現在のバングラデシュ社会で「語られていること」に耳を傾けてみよう。

i. スカーフと数珠

図3は現在の首相シェイク・ハシナがまだ野党時代だった1993年10月時点での戯画、図4は1996年3月15日発行の雑誌に掲載された戯画で、右に

27) 例えば、*Sangbād* 紙1996年7月21日の論説。

高田：ムスリムである／ムスリムになる

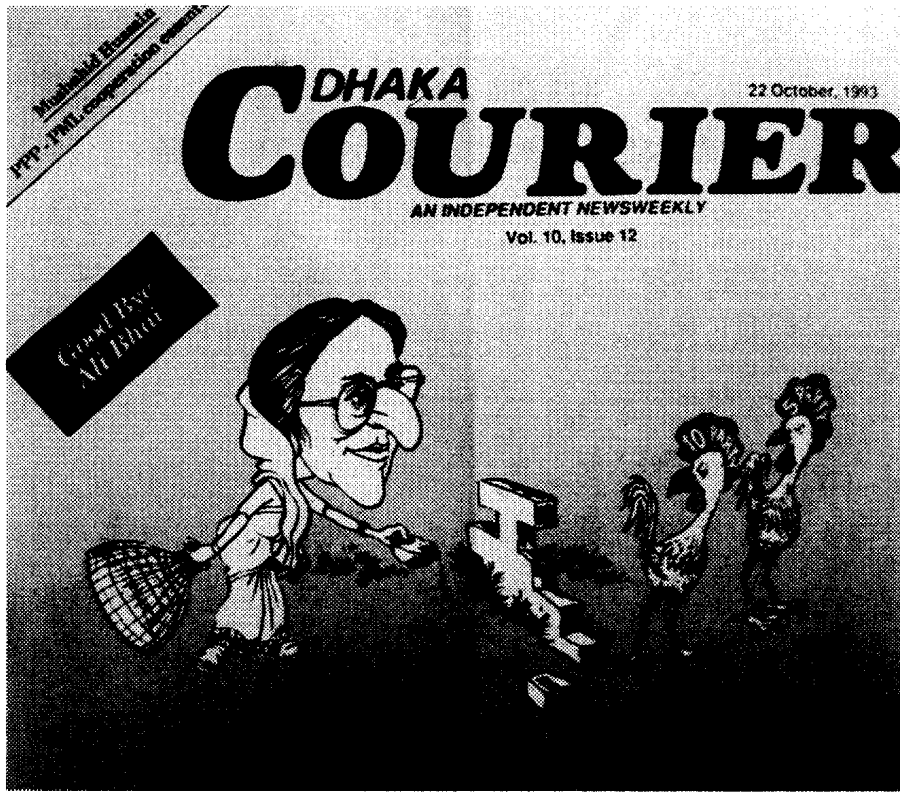


図 3



図 4

当時の首相カレダ・ジア（BNP 党首）、左にハシナが描かれている。この1996年3月15日というのは、実は極めて微妙な時であった。ちょうど1カ月前の同年2月15日に政権与党のBNPは野党が総てボイコットする中で

総選挙を強行したが、選挙当日は野党がホッタール（一種の強制ゼネスト）を呼び掛けたために、投票率は史上最低とも言われた。一応BNP政権が続投となったものの、野党側はそれに反発して独立戦争以来と言われた長期のホッタールを継続中であった。図4は、そうした緊迫した情勢の中で与党党首のカレダと野党第1党党首のハシナが権力の座を象徴する首相の椅子を挟んで睨み合い、というものである。しかし、ここで注目したいのは全く別の点である。それを理解するためには図5と見比べる必要がある。

図5は、1996年6月24日の新聞の1面トップに掲載された写真で、前日の首相就任式でのハシナの様子を写したものである。（やや見づらいが御容赦いただきたい）。図4から3ヵ月しか経っていないが、この間には大きな変動があった。図4の後も続いたホッタールに人々は疲れ、強引な手法を取り続けた野党側にも批判はあったが、それ以上に政権与党のBNPへの批判は大きくなり、終に3月末にBNPは政権を投げだす。その結果、4月には出直し総選挙が決定し、5月20日にはクーデター未遂騒ぎがあり、6月12日に出直し総選挙が実施され、その2日後には野党第1党であったアワミ連盟の勝利がほぼ確定したのである。そして首相就任式である。新首相となったハシナは黒いスカーフを頭に被り、その上から清素なサリーをま



図5

とい、左手には数珠を握って、首相就任宣言をしている。この姿は何を意味しているのだろうか。

再び図3と図4に目を向けると、はっきりとした違いが見出せる。少なくとも出直し総選挙が未だ決らなかった3月15日の時点まで、ハシナはずっとスカーフをしていなかったのである。何人かの友人に確かめてみると、ほぼ共通した意見として、出直し総選挙が決った前後からハシナはスカーフを被り始めた、ということであった。しかし、何のためだろうか。言うまでもなく、自分のムスリム性を強調するためである。ムスリムの場合、ヴェールが特別の意味を付与されていることについては、すでに大塚[1989]の指摘がある。ここではそれがスカーフに置き換わったにすぎない。多くの中東諸国においてヴェールの代用にスカーフが用いられていることは、イスラーム革命後のイランの例を見れば容易に理解できよう。しかし、スカーフだけからそこまで言えるのか、疑念を持たれる方もいよう。そこで、アンダーソンが言うように、コンテクストが重要になるのである。

同年3月末、ついにBNPが政権をあきらめ、出直し総選挙の実施が決ると、まだ選挙告示前であるが、各政党は一斉に選挙戦の準備に走り始めた。そうして徐々に政党間の舌戦にも激しさが増しつつあった4月23日の新聞は、小さな扱いはあったが一斉に、ハシナが近親者と共にハッジ（巡礼月期間中の正式なメッカ巡礼）に出発することを報じた。そして5月2日に戻るまで、丸々10日間も選挙戦を離脱してしまったのである。一部の人々は、この政治的に重要な時期の戦線離脱をいぶかしみ、選挙戦におけるアワミ連盟の出遅れを心配したようである。しかし、それ以後のハシナの行動は、この突然の行動が実は慎重に練り上げられた上で実行された大きな計画（ある意味では賭け）の一部であったことを物語っている。

アワミ連盟は、政党としては同国の諸政党中、最も組織的基盤がしっかりしていると言われている。それにも関わらず、前回（1991年）の総選挙ではBNPに敗れてしまった。それ以前は、長期間に渡り軍政ないし半軍政であったから、選挙があっても敗れることに不思議はなかった。しかし、

1991年の選挙は久々の民主的な選挙であり、多くの人は組織的基盤の強力なアワミ連盟の勝利を予測していたのである。ところが結果は思いもかけぬ敗北である。理由は色々と推測されるが、主なものは2つである。第1に、以前の政権担当時、すなわち独立から1975年のムジブ暗殺までの時期の失政を多くの人々が記憶していたこと。特に1974年のおよそ40万人が餓死したと伝えられる大飢饉の時の印象は、とりわけ村部の人々の胸に消し難い傷跡となって残っていた。第2は、アワミ連盟の政治姿勢である。元々独立以前から組織を持ち、反西パキスタンの姿勢とベンガリ・ナショナリズムの主張で知られてきた同党は、多くの人々から現在でも比較的宗教には寛容でリベラルであると思われている。そのイメージの当否はさておき、ムスリム以外の人々の大部分が主要政党の中では同党を支持していることは間違いないし、逆にBNPや国民党(ジャティオ・パーティ)の支持者はわずかである。BNPはそこを突いた。アワミ連盟はヒンドゥー寄り、インド寄りだ、と決めつけて、その点を徹底的に強調したのである。同国のムスリムは、インドが地域大国として我がもの顔で振る舞うからだけでなく、インドはヒンドゥーが多数派を占める国だという理由で、インドを嫌う。それと同時に、経済だけでなく軍事面でも地域大国であるインドに国の3方を囲まれていることに、漠然とした不安を感じ、恐れている。そうした反インド感情は、理屈抜きで根強いものがあるが、BNPはその弱味を突いたのである。BNPの作戦勝ちであった。

1991年総選挙の敗北理由のうち第1の方は、幸か不幸かBNPが政権に就いていた間に数々の失政をし、大規模な不正を行なったことで、結果的にバランスが取れ、問題ではなくなった。しかし困ったのは第2の点であった。ハシナを初めアワミ連盟のリーダーたちは、この国におけるイスラームの浸透を改めて見せつけられたはずである。しかし恐らく、具体的にはどのような手を打てば良いのか悩んだに違いない。出直し総選挙が決定するまで、彼らの行動にも主張にも格別変った所はなかったことから、それは確認できるだろう。公然と過度にイスラームを強調するわけにはいか

ない。国民の約10%に当る非ムスリムの人々の支持を失ってしまう上に、他の政党との差が見えなくなってしまうかねないからである。しかし、BNPが前回と同じ手を使うことが予想される以上、手をこまねいていて何もしないわけにもいかない。そこで、窮余の一策として考えだされたのが、政治的主張や政党としての活動ではこれまで通りに振る舞い、党首であるハシナ個人としてはイスラーム重視の姿勢を見せる、という解決法であったのではないか²⁸⁾。

こうしてハシナは事実上の選挙戦が始まってから、あえてハッジに出る。ハッジで不在となった間、各新聞はハシナに同行したレポーターから得た情報を、日々簡単に報じていた。ハッジは聖なる行為であるから、もちろん政治のような世俗の事柄を持ち込むことは禁じられている。その点ではハシナは十分に慎重であって、政治がらみのことは同行のレポーターにもそれ以外の誰にも一切語らなかった。しかし、ハッジに出たことが報道されただけで、すでに彼女の目的はある程度達せられたと言える。おまけに、「幸いにも」なのか政治的な配慮からなのかは定かではないが、サウジ政府は彼女を国賓待遇で処遇してくれた。これによりイスラーム世界の盟主を自任するサウジとの関係がクッキリと浮び上がることになった。各紙ともそれを報じたから、ハシナの意図は一層強調されることになった。

だが、これだけではまだ不十分だと考えたのであろう。帰国後すぐに彼女は各地で遊説を開始するが、その途中の何箇所かで再び驚くようなパ

28) この解決策が話し合いの上で考えだされたものであるのか、それともハシナ個人の着想か、その点にははっきりしない。しかし、少なくとも十分に考えた上の行動であることだけは確かであろう。

ちなみに、ハシナの名誉のために付け加えておけば、元々彼女は熱心なムスリムとして一部の人には知られてきた。その証拠に、すでにこれ以前にもハッジを果している。しかし、これまではあくまでも個人の信仰は個人の信仰として留め、政治の場とは切り離してきたのである。だが、そうした姿勢では人々を完全に納得させられないことに気づき、ついに、間接的な形ではあるが、政治に宗教を持ち込まざるを得なくなった、と考えられる。

フォーマンスを見せる。同行の記者団を連れのままマジヤル（イスラーム聖者廟で特別の御利益があるとされ、そこではしばしば願掛けがなされる）を訪れ、彼らの前で熱心に祈りを上げたのである。もちろん、彼らはその姿を写真に収め報道した²⁹⁾。この国において、女性がマジヤルで祈ることには大きな意味がある。イスラームでは女性がモスジッドに入ることは許されておらず、祈りはあくまでも各個が家の中で目立たぬように行なうしかない。ところが、マジヤルでは男性と同じように中に入って祈りを上げることが許されている。おまけに、女性にとっても男性にとっても、マジヤルで願掛けすることは実は最も身近で庶民的な信仰の形である。つまり、マジヤルで祈る姿を見せることで、ハシナは信心厚いムスリム女性としての信仰の姿と庶民としての信仰の姿を、両方一度に人々の心に刻み込んだと考えられるのである。

結局、アワミ連盟は選挙に勝った。その勝利にどれほどこうしたハシナの姿が貢献したのか、直接計ることはできない。しかし、人々がそうしたハシナの姿に注目していたことは間違いない。先に述べたように、いつ頃からハシナがスカーフを被っていたのかと友人たちに質問したのだが、時期についての回答はまちまちだったものの、ハシナがそれ以前は被っていなかったスカーフを被るようになったという事実だけは、皆一様に気づいていた³⁰⁾。このことだけでも、それは明らかであるが、念のために別の方法で確認してみよう。

図6は首相就任直後の6月26日の新聞に掲載された戯画である。左手のテレビの画面から顔を突き出しているのはハシナで、右手に座ってそ

29) 例えば、手元にある切り抜きを見ると、5月14日に遊説で訪れた東北の中心都市シレットでは、一日のうちに、その古さと御利益とで有名なマジヤルを4つも回ったことが、祈りの最中の姿を写した大きな写真入りで報じられている。

30) 認知心理学の研究からは、ヒトがヒトの顔ないし顔に類似したデザインに敏感に反応することが指摘されている [シェパード 1993: 202]。ハシナのスカーフに皆が気がついてきたということも、こうした人間の生物学的基礎に基づいているのかもしれない。



図 6

れを見ている後ろ姿の女性は、テレビの脇の鏡に写る姿から、敗れたBNP党首のカレダであることが分かる。攻守交替した両者の姿を風刺したものであることは言うまでもないが、問題は2人の姿である。ハシナは明らかにスカーフをしているのに対して、カレダはサリーの端を頭の後ろに申し訳程度に掛けているだけ。図7は、首相就任からしばらく時間が経った10月1日発行の雑誌に掲載された戯画であり、首相の座に座るハシナに、選挙に敗れてボロボロになったカレダが外から無理難題を投げつける姿が風刺されている。しかし、全く別の作者が描いているにもかかわらず、ここでもスカーフ姿のハシナが描かれており、髪をむき出しにしたカレダとの対比は一層くっきりとしている。さらに、首相就任からようやく2ヵ月ほど経ったばかりの同年9月にダッカの街角でみつけた絵葉書（図8）は、黒いスカーフを被りその上から白いサリーを目深に掛けた格好で、アッラーに対して熱心に祈りを上げるハシナの姿を早くもクローズアップしていた。その脇にはフワフワとした髪を強調したカレダの姿をアップで捉えた絵葉書が並んでいたから（図9）、両者の対照は誰の目にもあまりに明らかであった。こうして見てくると、やはり、ハシナの戦略は当たっていた、人々はアワミ連盟とイスラームが相反するとはもはや思わなかったに違いない、

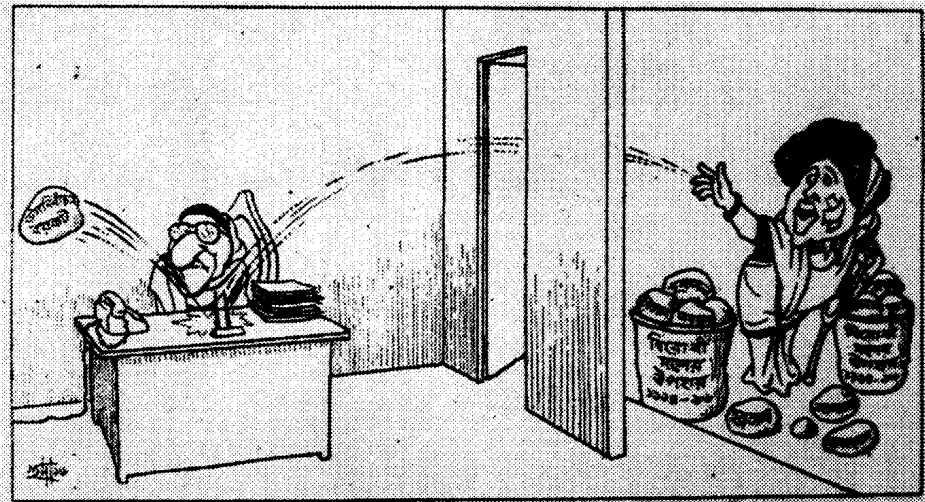


図7



図8



図9

と解釈するしかないのではなかろうか。しかし、話はこれだけに留らないのである。

再び目を図5に戻してみよう。ハシナの左手に注目していただきたい。そこには数珠が見えるであろう。数珠をムスリムの人々はトスビ (*tasabi*,

tasabih) と呼んでいる。このトスビについては、カルカッタ発行のベンガル語・英語辞書でも、ムスリムの用語と説明されているし、バンガラ・アカデミーの辞書では、はっきりとアラビア語起源であることが記された上で、「ムスリムが用いる 100個のビーズから成る数珠」との説明がある。しかし、これは必ずしも正確な説明ではないようである。あるイスラーム辞典によれば [HUGHES 1976: 546], そもそも数珠は仏教徒の習俗が伝播したものであることを認めた上で、次のように説明されている。「アッラーの名と共に、アッラーの99の属性を数えるのに用いられる。もしくは、*Tasbīh* (“O Holy God !”), *Tahmīd* (“Praised be God !”), *Takbīr* (“God is Great !”) の繰り返しや、帰依行為としての暗唱のためにも用いられる。ペルシャ語やヒンドウスターニー語では *Tasbih* と呼ばれる」。つまり、元々は「オオ、聖なる神よ！」を意味する語が転化して伝わったのであろう。しかし、実際には人々がどのようにそれを捉えているのであろうか³¹⁾。図10は、ラジャッカールと呼ばれた人々の変遷を風刺した戯画である。ラジャッカールとは、独立戦争直前からその最中にかけて西パキスタン側に立って、独立運動を行なう人々に対しテロ行為を働いたイスラーム原理主義の民兵集団の一つであり、イスラーム協会と深い関係にあることは良く知られている。独



図10

31) 一部のヒンドゥー教徒も数珠を用いるが、ムスリムが用いるものとは素材も形態も異なる。ここではあくまでもムスリムが用いる数珠のことだけを論じる。

立戦争終了後は捉えられていたが (一番左), 1975年のムジブ暗殺後には自由の身となり (その右), 1991年の総選挙ではイスラーム協会の姿で当選して議会で演説し (右から2番目), 1996年にはイスラーム系の大衆集会で偉そうに説教をするまでに復権してきた (右端), と順を追って風刺されている。問題は右端の説教をしている男の手に数珠が握られていることである。トウピ (ムスリムが被る帽子) にパキスタンのマークが書き込まれていることから、タイトルにはっきりとラジャッカルと記されていることから、これがイスラーム原理主義過激派の描写であることは疑う余地がない。その手に数珠がある。しかも、これは偶然ではないのである。図11は、別の原理主義者たちが起こした事件についての報道に添えられた戯画である。トウピだけでなく、フサフサとした髭と、刈り上げられた頭髪は、いずれも彼がコチコチの原理主義者であることをはっきりと示している。その所業があまりにもひどいので、悪魔に比して描かれているのだが、この際、事件のことは脇に置いておこう。問題はその右手である。ここでも彼は数珠を握っている。

以上2つの図が明らかにするのは、少なくとも現在のバングラデシュでは、こうした数珠がイスラームと、それもかなり原理主義的なムスリムと結び付けられて理解されている、という事実である。その数珠を首相就任式でハシナは握っていた。しかも、それは単なる偶然ではない。実は、そ



図11

の前後のマジャル巡拝や各種の公式行事の祈りの際にも、彼女が数珠を握っている姿がしばしば報道されているのである。

結局、スカーフと数珠という自己像を流布し、ハッジやマジャル巡拝等について報道されることを通じて、彼女は自らのムスリムとしての側面を強調したアイデンティティーを表示し、それを人々は確認し、その結果、彼女は人々の心の中に新たに浮び上がった「肥大した自己像を回収」したのではなかろうか。

ii. 政治家・政党とバングラデシュ化したイスラーム

ハシナが、非常に巧妙な仕方で、自分のムスリムとしての新たなイメージを人々の心の中に創り上げたことを認めるとして、他の人々や政党は指をくわえたままそれを追認していたのだろうかという疑問が生じよう。しかし、もちろんそんなことはない。

元大統領で国民党党首のエルシャドが、少なくとも表面上は、熱心なムスリムであることは誰隠すことのない事実であり、特にフォリドプールのアトロシーを拠点とするピール（聖者 *pir*）への傾倒ぶりは有名であった[佐藤 1990: 118-120]。ところが、長期に渡る収監から仮釈放されて以来（もしくは収監中から？）、両者の関係には亀裂が生じているようである。図12は1997年6月3日発行の雑誌に掲載された戯画であるが、左手では巡礼



図12

の姿をしたエルシャドがアトロシーに別れを告げている。それに対して、右端にはマニクゴンジのピールらしき行者が座り、その前には「受け付け中」の看板があり、ダルガー（ピールの住み家）の世話係と覚しき男が、「いらっしゃい、旦那。弟子におなりなさい」と呼び掛けている。つまり、エルシャドは、アトロシーのピールとの中に亀裂が入っても、ピール崇拝を止めたわけではなく、すぐさま次のピールの所に向っていることが皮肉を込めて描かれているのである。こうした聖者崇拝は、知識人や原理主義者には受けが悪いが、庶民の中では全く状況は異なる。マジヤル崇拝は、とどのつまりはピール崇拝の延長上にあるとも言え、逆にピール崇拝はマジヤル崇拝のより現世的な展開であるとも考えられるが、どちらにしても両者の間に密接な関係があることを疑う余地はない。つまり、両者は共に庶民的イスラーム信仰の一つの典型的な形なのであって、それがゆえに、こうしたエルシャドの姿は一般大衆からむしろ好感を持って受け止められる可能性が高いと言えよう。

他の政治家たちも負けてはいない。図13は、2人の人物がブルカ（保守的なムスリム女性が外出時に身に付けるコートとフード一帯型の上着で、顔



図13

には付属のヴェールが垂らされ、ほとんど全身が覆われるようになる)のヴェールを持ち上げてお互いに正体を表わしながら、「私たちは本当のムスリムだったのだ」と言っているところである。左側の人物はイスラーム協会の事実上のリーダーであるゴラム・アザム、右側の人物はカレダである。前述の通り、イスラーム協会はラジャッカルとの関係が強い極端な原理主義政党であり、特にこのゴラム・アザムは独立戦争当時の戦犯として一時期はパキスタンに逃亡し、帰国後もしばしばリベラル派からは名指しで過去の罪状を批判されるいわくつきの人物である。他方、カレダは、先ほどのハシナとの対比でも明らかなように、元々派手好きで有名であり、本来ならばブルカなどとは無縁の人物である。その2人がこうしてブルカを着ている。もちろん、男性のゴラム・アザムがブルカを着るわけではなく、あくまでも風刺に過ぎないが、この作者が両者の最近の「ムスリムぶり」の強調を滑稽に思ってこうした戯画にしたことは明らかだろう。カレダの「イスラーム化」はこれに留らない。ハッジには行きそびれたが、政治の状況がやや膠着状態に陥った1996年11月末、彼女が突然メッカにオムラ (*umrah*)に行くことが報道された。オムラは、巡礼月のハッジ以外の時期に行なわれる私的な巡礼である。それを各紙は一斉に報道。ただし、彼女の主な目的は病気(詳細不明)の治療を受けることであって、しかも私的巡礼とはいえ聖なる行為であるはずのオムラの中に、サウジ在住のバングラデシュの人々を集めてかなり過激な演説を行なったので、一部の新聞ではかえって批判の対象にされてしまったが。

ひるがえってアワミ連盟はどうであろうか。果たしてハシナ一人が突出してムスリム性を強調しただけであるのか。図14は、アワミ連盟が政権を握った後、そのことを亡きムジブの墓に報告している所を報じた写真である。中心よりやや左手にスカーフの上からサリーを目深に被ったハシナがおり、その周囲を党のリーダーたちが取囲んでいるが、ほとんど全員がトゥピを被り、パンジャビ・パイジャマ姿の上からお揃いの「ムジブ・コート」を着て、誰もが熱心に祈りを上げている。ムジブ・コートはアワミ連盟の



図14

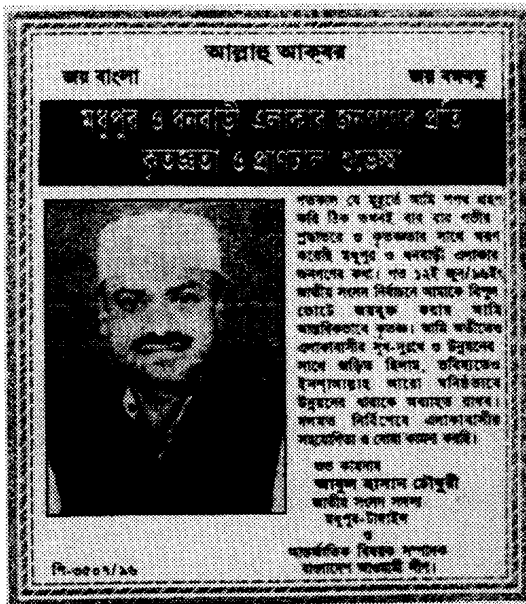


図15

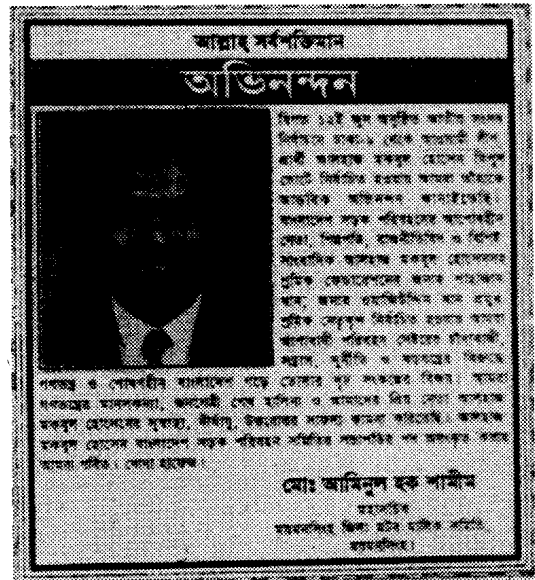


図16

シンボルであるとしても、トゥピ、パンジャビ・パイジャマは完全にこの地域におけるイスラームのシンボルである。しかも、報道する側も、あえて祈りの姿を写して、その写真を大きく掲載する。こればかりではない。図15と図16は、いずれもアワミ連盟の国会議員が新聞に掲載した当選御礼広告である。注目すべき点は、図15では、わざわざトゥピを被った姿の上半身だけのアップの写真を入れ、しかも上の方にはアワミ連盟のスローガンである「ジョイ・バングラ」(ベンガル万歳)、「ジョイ・ボンゴ・ボンドウ」

(ベンガルの友 [ムジブ] 万歳) よりも大きな活字で中央に「アッラー・アクバル」(アッラーは偉大なり) と記していることである。図16ではさらに徹底しており、トゥピこそ被らないものの熱心なムスリムである象徴としての刈り揃えたあご髭姿のアップの写真に、上にはただ「アッラー・ソルボシヨクティマン」(アッラーは全能なり) とだけ記して、「ジョイ・バングラ」も「ジョイ・ボンゴ・ボンドウ」もない。ここでは、ただひたすらムスリムとしての側面だけが強調されていて、文章の中にアワミ連盟から当選した旨が記されていないければ、これまでのアワミ連盟のイメージからは彼の所属政党は決して推し量れないであろう。ハシナだけではなかった。アワミ連盟は、実は党を上げて、言葉には出さなくとも、それ以外の様々なチャンネルを通じて、自分たちの変身(もしかすると本来の姿?)をアピールしていたのである。

こうした政治家たちの行為を一般の人々はどう見ているのであろうか。リベラルな知識人たちに評判が良くないであろうことは容易に想像がつく。しかし、一般大衆の受け止め方は違うようである。ある新聞に、それまで無名であったマジダルが急に有名になり、今では人が押し寄せるようになったプロセスを報じた記事が掲載されたが、そのきっかけはカレダが(恐らく誰かに勧められて)そのマジダルを巡拝したというニュースただそれだけであったという³²⁾。ここから明らかになるのは、政治家の一般の人々に及ぼす影響力の大きさである。一般大衆は、声高に叫ばれるスローガンを別にすれば、政治家の演説や公約などには鈍い反応しか示さないかもしれないが、目に見える形での行動や、服装などによる象徴的な表現には、敏感に反応するようである。

ただし、注意しなければならないのは、ここで言われているイスラームが必ずしも中東のアラブ地域におけるイスラームと同じであることを含意していない、ということである。むしろ、マジダルやピールに対する信仰

32) M.A.Āmin, "Ekti mājār: Gare othā o bikhyāt haye othār kathā", Sangbād 紙 1996年 10月28日。

の在り方を考えてみればすぐに明らかにあるように、現在のバングラデシュにおけるイスラームは多分に独自の要素を含んでいる。もちろん、このことは「イスラームにおいてイスラームは一つしかありえないが、ムスリムは世界中のムスリムの数だけ多様である」というしばしばなされる説明からも明らかである。しかし、ハシナとアワミ連盟の場合に最も典型的であるように、表向きは元々の地域性すなわち「ベンガル」を強調し、そのじつ徐々にムスリムとしての側面を様々な機会にちらつかせてゆくようなやり方は、その結果、これまでとは質的に異なる何かを生みだしてきつつあるのではなかろうか。

図17と図18は、まさにそうしたことを感じさせる例である。どちらもベンガル暦新年を祝った広告であるが、図17では、バングラデシュを代表する花の一つで大変に香り高いロジョニゴンドラ（月下香）が右に描かれ、左にはモスジッドがイスラームの印の新月を添えて描かれている。他方、図18では、やはりロジョニゴンドラを図案化したと覚しき大きなデザインの下に左の方に小さくラクダが描かれている。ラクダは、言うまでもなく中東の、引いてはイスラームの象徴であろう。図17は宝石商の、図18は鉄を扱

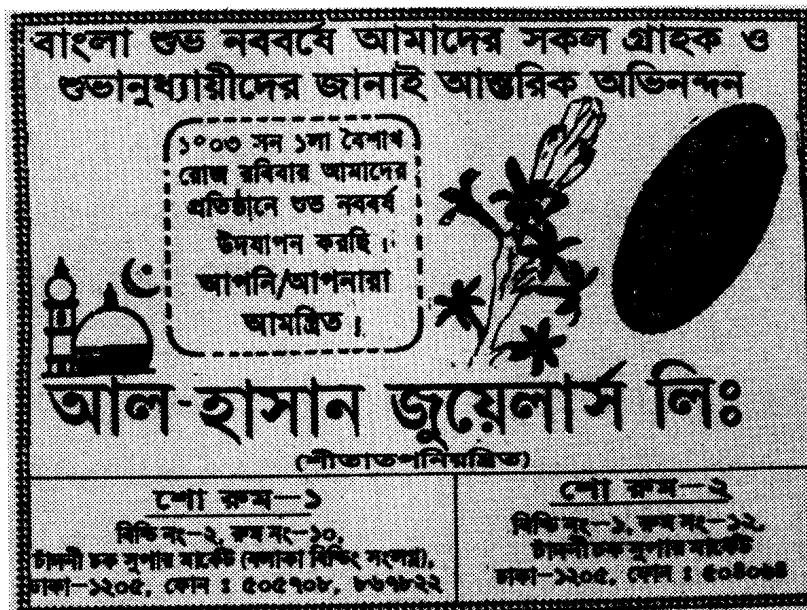


図17

R.M. GROUP

আর. এম গ্রুপ অব ইন্ডাস্ট্রিজ এর পক্ষ থেকে
নববর্ষের শুভেচ্ছা।

আসল উটমার্কা টেউটিন এর প্রস্তুত কারক প্রতিষ্ঠান আর.এম স্টিল মিলস্ লিমিটেড
এবং আর.এম সুপার স্টিলস্ লিমিটেড এর আরও একটি নতুন সংযোজন

■ আর.এম স্টিল মিলস্ লিমিটেড- ইউনিট-২

দেশের অর্থনৈতিক উন্নয়নে, ক্রেতা এবং এজেন্টদের চাহিদা পূরণে শীঘ্রই
শুভ উদ্বোধন হতে যাচ্ছে আর এম স্টিল মিলস্ লিমিটেড- ইউনিট-২

আসল উটমার্কা টেউটিন এর প্রস্তুত কারক প্রতিষ্ঠান

■ আর.এম স্টিল মিলস্ লি., ■ আর.এম সুপার স্টিলস্ লি., ■ আর.এম স্টিল মিলস্ লি., ইউনিট-২
আর. এম গ্রুপ অব ইন্ডাস্ট্রিজ এর অন্যতম প্রতিষ্ঠান।

<p>বেঙ্গল অফিস : ১০/১ নতুন ইন্ডাস্ট্রিয় রোড নয়াবাজার, ঢাকা। ফোনঃ ২৩০২৯৯, ২৩০২৯০ ফ্যাক্সঃ ৯৬০০২৭০</p>	<p>চট্টগ্রাম অফিস : ১০/৫, লাফু ভবন ৭৫, বাতুনগঞ্জ, চট্টগ্রাম ফোনঃ ১১২৭১১, ১১৩৬১০ ফ্যাক্সঃ ৯০১২৪৯</p>	<p>ফ্যাটীরা : কাপরাড়ী, আড়াইহাজার নারায়নগঞ্জ।</p>
---	--	--

図18

う企業グループの広告であって、いずれも図のデザインとは必然的な関係を見出せない。また、この2つの広告は別々の新聞に掲載されたものであり、2つの広告主の間にも特別の関係があるようには思えない。それにもかかわらず、両者が一致して「ベンガル暦」新年の広告に「イスラーム」を象徴するものをあえて書き加えているのである。ベンガルとイスラームの自然な融合の姿。ここにはすでに、彼ら独自のベンガルがあり、彼らの思い描く独自のバングラデシュがある、と解釈することは行き過ぎだろうか。

iii. 町に溢れるイスラーム

バングラデシュはリクシャの国である。都市部でも村部でも、国じゅう至る所にリクシャが溢れている。リクシャには、特に都市部のリクシャには色鮮やかなペインティングが施され、これでもか、これでもか、と言わんばかりにゴテゴテ飾り立てられている。同国に行ったことがある人なら、誰でもその印象は強烈であろう。しかし、そうした印象はそれはそれで大事にしなければならないだろうが、その陰で見落されがちながある。実はほとんどのリクシャには、そのどこかに必ず小さなイスラームを象徴する記号が付けられているのである。例えば、図19はあるリクシャを後方から見たものである。幌の派手な飾り付けと、下方の映画の俳優たちを描いた飾り板との間、中央部の菱形の中を見ていただきたい。アラブ文字で「アッラー」と記されている。別のリクシャの背もたれ部分を見ると、そこにはモスジッドが美しく描かれている (図20)。あるリクシャの幌には、祈りを上げるムスリム女性が大きくクローズ・アップされ、その背景にはモスジッドのシルエットが浮かんでいる (図21)。別のリクシャの幌では、湾岸戦争でアメリカを初めとする多国籍軍を相手に雄々しく戦ったイスラームの勇者 (?) サダム・フセインがニッコリ微笑む (図22)。

リクシャばかりではない。町じゅうをこま鼠のように走り回るベビー (小型オート3輪タクシー) の正面を見ると、上の飾り板の中央にはメッカのカーバ神殿が描かれ、その左右にはやはりアラブ文字が踊る (図23)。フロント・ガラスの左右には花飾りの中にまたしてもアラブ文字が描かれ、フロント・ガラスの上方にはデフォルメされているが、これもアラブ文字。同じベビーの中に乗り込んで前を見てみると、運転席の前、フロント・ガラスのすぐ上の枠の所には、今度はベンガル語で「ビスミッラー……」 (慈悲深きアッラーの名において……) と記されている (図24)。リクシャを蹴散らすように走るミニ・バス。その飾り気のない車体も、よくよく見てみると、正面フロント・ガラスの上、ボディのほんのわずかな隙間には、またまたしっかりとアラブ文字が踊っているのである (図25)。こうして数え

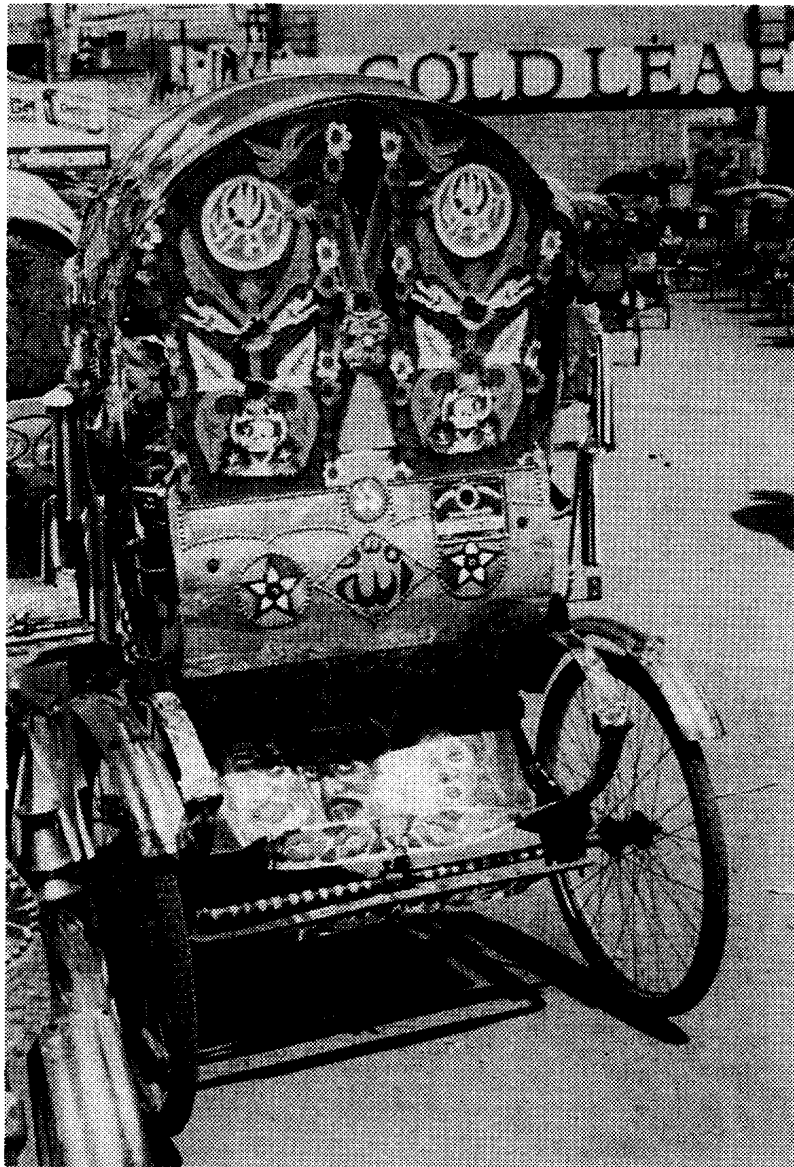


図19

上げればまだまだ枚挙にいとまないほどだが、この辺りで止めておこう。

インドに行けば、町じゅうほとんどあらゆる場に神様や宗教にからんだものを見出せるし、それに誰もが嫌でも気づかざるを得ない。他方、偶像崇拝を禁ずるイスラームのためもあり、また、しばしばベンガル語による表現で記されているためもあって、一見するとバングラデシュにおいてイスラームを象徴するものを見出すのは難しい。しかし、注意して辺りを見回せば、実はこのような形でイスラームのシンボルが町じゅう至る所に溢れかえっているのである。歴史学の研究において、ビラがアイデンティ

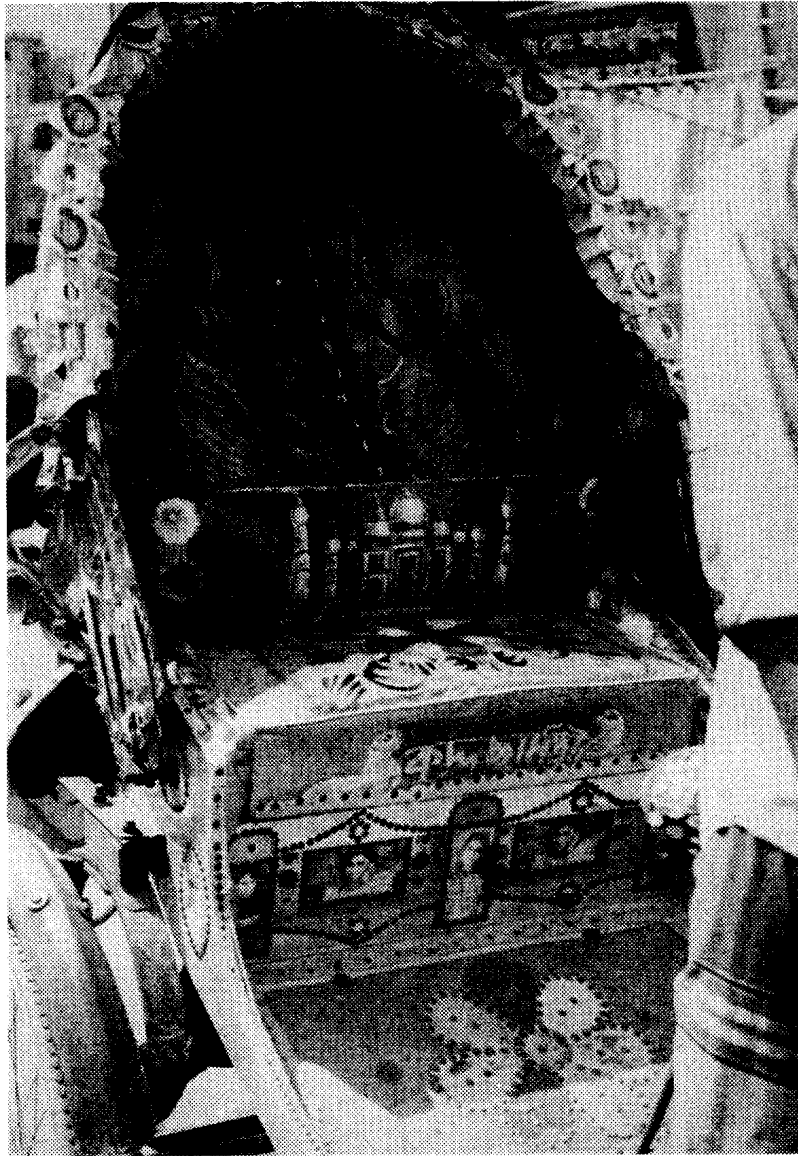


図20

ティーを創り出すとの指摘がなされているが [増谷 1987: 244], 同様なことはビラに限らずこの種の様々な記号についても言えるのではなかろうか。

Ⅲ. アイデンティティーの (再) 創造

バングラデシュでは、毎日どこかで必ず、独立戦争のことが語られている。新聞や雑誌の記事として、または、テレビやラジオでドラマの形で。それらは、独立戦争として直接言及される他に、ムクティ・ジョッダ (独立戦争の闘士) の話として、彼らの現在の境遇として、シヨヒド・ミナール

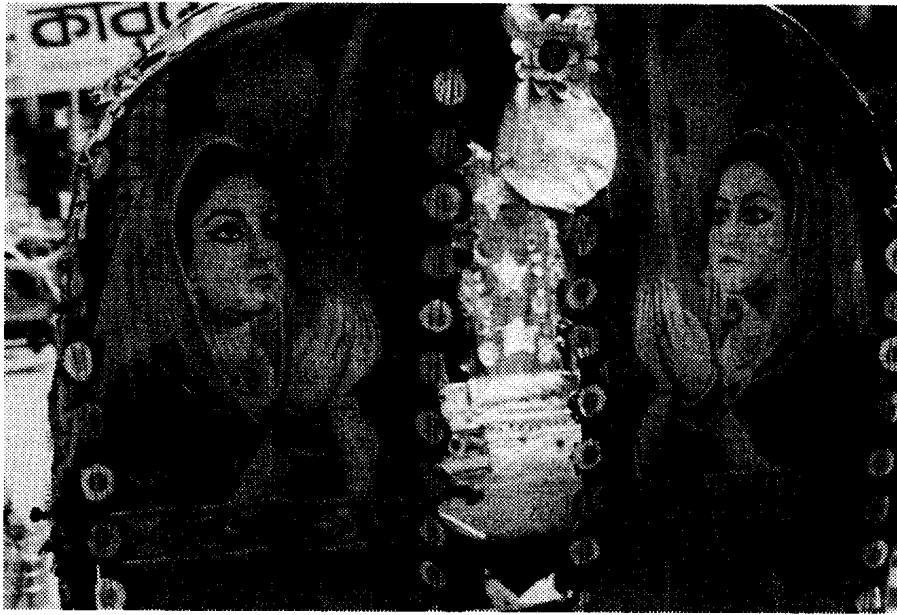


図21

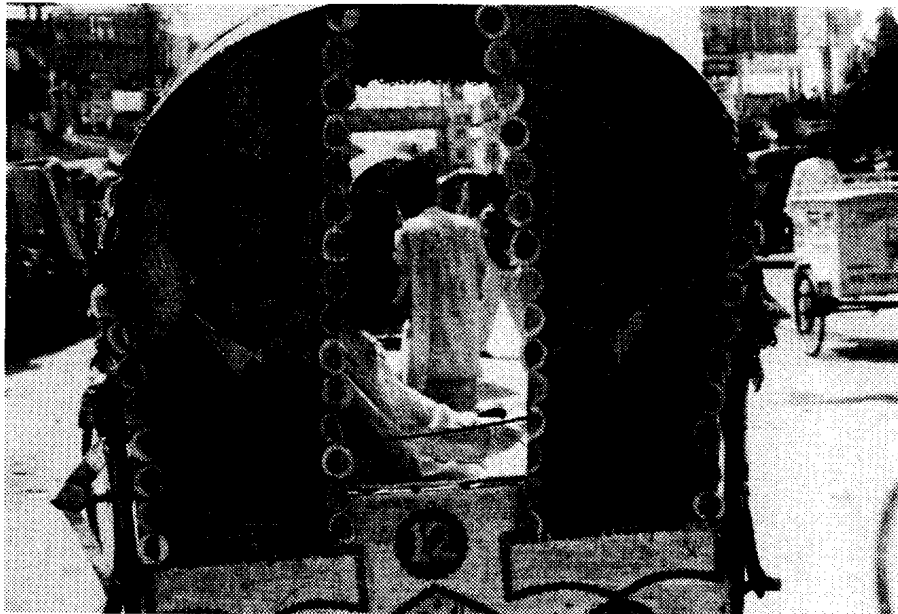


図22

(殉難者記念碑)として、1971年(独立の年)として、さらにはそれを略して単に「エカットール(71)」として語られる。この他にも、毎年多数の独立戦争関連の研究書や誌集や記憶を綴ったエッセイ集の新刊が出版される。まるでそれ以前には歴史がなかったのではないか、という錯覚に襲われる



図23



図24



図25

気さえするほどである。これらは、一つ一つは別の内容を語っているようでありながら、実はその全てがたった一つのことだけを伝えているように思われる³³⁾。ベンガルの地にあるムスリムの国、バングラデシュ。同じイスラームを信奉しながら「西」と同じパキスタンには留ることが耐えられなくなったベンガル人のムスリムの国、バングラデシュ。そのバングラデシュの誕生・独立、それこそが現在のバングラデシュの国としての正統性の唯一の根拠だ、ということである。

記念碑について、B. アンダーソンは卓抜な見解を示している。「記念碑は一種の発話」であり、その発話の内容は理解することができる。また、記念碑は同時に2つの時間的方向性をその中に秘めている。すなわち、それは一方では「過去の出来事や経験を記念し」、他方では「永続性を持つために、後世に向う意図がある」、と言うのである [アンダーソン 1995: 249-250]。バングラデシュの場合で言えば、独立戦争の、または独立を獲得するまでの長い闘争の殉難者、ショヒード（本来はムスリムの聖戦における殉

33) この点について、詳しくは高田 [1996, 1997a] 参照。

死者を現す語) たちのことを記念した記念塔であるショヒド・ミナールは、まさしくここで言われる記念碑そのものである。しかし、「記念碑」は、必ずしも記念碑の形を取ったものである必要はない。ショヒド・ミナールでなくとも、ムクティ・ジョッダという言葉でも、エカットールだけでも良いのである。それを聞く時、人々は誰もが一様に独立戦争とその当時の経験を呼び覚まされるが、それは同時に、あくまでも現在のバングラデシュで語られているのであり、そしてこれからのバングラデシュの出発点でもあるという意味では明らかに未来をも志向している。

他方、独立戦争、もしくは独立と聞く時、バングラデシュの誰もが一人の男を思い起さずにはいられない。ボンゴ・ボンドウ (ベンガルの友) と親しみを込めて呼ばれる初代首相、アワミ連盟の中心人物、ムジブである。アワミ連盟が再び政権に就いて以来、同党の人々を中心にして、しきりに彼のことを「ジャティオ・ピタ」(国民の父) と呼ぶような試みがなされているが、これは多分に政治的意図から発していることは言うまでもない。しかし、そのような言い方をせずとも、多くの国民はムジブのことを忘れはしないし、たとえアワミ連盟に反発を抱く人でさえもその多くはムジブを完全には否定しない。いや、否定できないのである。それほど彼の存在は、それ自体が独立にとって決定的な意味を持っていた。しかし、「ベンガルの友」であるムジブは、実はイスラミック・ファウンデーションの創始者でもあった。そのムジブの娘であり、同じアワミ連盟の現党首であり、ムジブの肖像を背にしてかすかに微笑む現首相のハシナ (図2) は、熱心なムスリムであることをもはや隠そうとしなくなっている³⁴⁾。そして、独立を主導し、独立直後には圧倒的な人気を誇り、今再び政権の座に就き、ジョイ・バングラを合言葉にする、伝統的にリベラルなはずの「ベンガル人」の政党、アワミ連盟は、やはりイスラームへの傾斜を強めている。

他方、宗教教育を通じ、言葉を通じ、日々の奇妙な事件の報道を通じ、さ

34) ムジブとイスラームの関係について、より詳しくは高田 [1997a] 参照。

らには町じゅうに溢れかえる記号を通じて、ムスリムたちは、時々刻々、日々、自分のムスリムとしてのアイデンティティーを問われている。しかも、ここで言うムスリムは単なるムスリムではない。ショヒド・ミナールがそびえ立つ国、ムクティ・ジョッダのいる国、エカットールの国、独立バングラデシュに生きるムスリムとしてのアイデンティティーを問われているのである³⁵⁾。いや、一方的に問われているのではない。正しく言えば、それは、一人一人が様々な仕方で自らのムスリム性を表現し、そのことを相互に確認する、というプロセスの一環でしかありえない。こうして各自が表現し、相互確認した上で、問いに対する答えを出そうとする。すなわち、自分なりに把握した状況認識に合わせて人々はすぐさま自らの姿を修正する。であるとすれば、当然、そこに現れてくる姿は以前と全く同じではありえない。

そこに新たに浮び上がる姿、新たに（もしくは再度）創り上げられた姿は、どのようなものであろうか。すでにその片鱗は現れているようにも思われる。それは図17や図18に現れた像であり、ジョイ・バンガラと叫びながらナマーズ（礼拝）の姿勢を取る人々なのではなかろうか。そうした片鱗を少しずつかき集めることが、いつの日にか姿を隠している魚の全体像を捉えることにつながると信じて、一先ずこの稿を終えたい。

参 考 文 献

- アンダーソン、ベネディクト、1995（1990）、「漫画と記念碑——スハルト新体制下の政治的コミュニケーションの展開——」『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求——』（中島成久訳）、日本エディタースクール出版部、pp. 218-276, 449-461.
- 安藤和雄、1996、「英語を操らないシッキト（知識人）の台頭」『アジ研ワールド・トレンド』18, pp. 36-38.

35) これとは逆に、非ムスリムの人々は、同じように毎日繰り返し、非ムスリムとしてムスリムがマジョリティーを占める国で暮している自分の姿を否応なく見せつけられ、自分のアイデンティティーを問われていることは、言うまでもない。

- HUGHES, Thomas Patrick, 1976 (1885), *Dictionary of Islam*, Oriental Books Reprint Co., New Delhi.
- NETTLER, Ronald L., 1995, "Dhimmī", *The Oxford Encyclopedia of Modern Islamic World*, Vol. 1, pp. 374-5.
- 増谷英樹, 1987, 『ピラの中の革命——ウィーン・1848年——』東京大学出版会。
- 二宮・樺山・福井編, 1982, 『魔女とシャリヴァリ (アナル論文選1)』新評論。
- 西村清和, 1997, 『視線の物語・写真の哲学』講談社。
- 大塚和夫, 1989, 「あご髭とヴェール——衣装からみた原理主義運動——」『異文化としてのイスラーム——社会人類学的視点から——』同文館, pp. 231-284.
- 佐藤 宏, 1990, 「バングラデシュ政治とイスラム」, 佐藤編『バングラデシュ: 低開発の政治構造』アジア経済研究所, pp. 87-138.
- 佐藤忠夫, 1993 (1956), 「日本映画の伝統」『大衆文化の原像』岩波書店, pp. 3-38.
- シェパード, R. N., 1993, 『視覚のトリック: だまし絵の語る〈見る〉しくみ』(鈴木光太郎・芳賀康朗訳), 新曜社。
- 高田峰夫, 1996, 「バングラデシュ・ムスリムのアイデンティティーに関する一試論——歴史的概観による再検討—— (前編)」『広島修大論集』37-1 (1) (人文編), pp. 219-255.
- , 1997a, 「バングラデシュ・ムスリムのアイデンティティーに関する一試論——歴史的概観による再検討—— (後編)」『広島修大論集』37-2 (人文編), pp. 339-370.
- , 1997b, 「ダッカに見るここ10年の変化——バングラデシュ印象記 (6)——」, 『遡河』8, pp. 13-20.

図版出典一覧

- 図1 *Jāyajāyadina* (Jaijaidin), 1997年5月6日号表紙。
- 図2 *Janakantha*, 1996年7月11日掲載。
- 図3 Dhaka Courier, 1993年10月22日号表紙。
- 図4 Dhaka Courier, 1996年3月15日号掲載。
- 図5 *Janakantha*, 1996年6月24日掲載。
- 図6 *Sangbād*, 1996年6月26日掲載。
- 図7 *Jāyajāyadina*, 1996年10月1日号掲載。
- 図8 Azad Products 社絵葉書。
- 図9 図8に同じ。
- 図10 *Sangbād*, 1996年12月6日号別冊付録掲載。
- 図11 Dhaka Courier, 1997年7月25日号掲載。

高田：ムスリムである／ムスリムになる

図12 *Jāyajāyadina*, 1997年6月3日号掲載.

図13 *Sangbād*, 1997年8月13日掲載.

図14 *Sangbād*, 1996年6月27日掲載.

図15 *Janakantha*, 1996年6月23日掲載.

図16 *Janakantha*, 1996年6月22日掲載.

図17 *Janakantha*, 1996年4月14日掲載.

図18 図17に同じ.

図19～図25 筆者撮影.

Summary

Being A Muslim/To Be A Muslim: Presentation, confirmation, and (re-)generation of identity in Bangladesh

Takada Mineo

In recent years, *Masjid* tends to be an arena of the political activities in Bangladesh. Even *Bāytul Mokārrām*, National *Masjid*, has become a base of the Islamic fundamentalists. Many people claim that this trend is just a “projection” of a small part of the fundamentalists. The author wonders whether it is the case. Before judging so, we will have to see the other aspects of the society.

We can find the reports of many “curious” events in newspapers or in magazines throughout the world. In the case of Bangladesh, however, some of these events cannot be understood without the recognition of the permeation of Islam through the society, irrespective of the difference of the area, i.e. rural or urban, and the difference of the social strata, i.e. upper or lower. This permeative phenomenon of Islam must, of course, be distinguished from the activities of the so-called Islamic fundamentalists mentioned above. How is this permeative phenomenon of Islam realized?

There are various channels of the religious education for Muslim children in Bangladesh. One example is *Maktab*, the unofficial (not private, but semi-official) small religious school opened in *Masjids*. This is the school for children of the pre-primary school age. Another is the class for religious education in the public primary schools. And the other is, of course, *Madrasa*, a formal Islamic school. Almost all Muslim children have experienced such a “printing” of Islamic memory in their early age.

In the fields of language use, we must pay attention to the massive influx of Arab-Persian terms into Bangladesh-Bengali vocabulary. Usually, we need to use Bengali-English Dictionary edited in Dhaka, instead of the Calcutta version, to interpret a newspaper or a magazine published in Bangladesh. In some extreme cases, we will have to address some special types of dictionary such as “Dictionary of Arabic and Persian Words Used in Bengali” written in Bengali, or “Islamic Encyclopedia”, etc.

Chapter II tries the detailed examination and analysis of pictures, illustrations or cartoons appeared in the papers or magazines in Bangladesh. The analysis is focused on three points, i.e. the use of scarf and rosary, Islamization of the politicians and the political parties, and the flood of Islamic symbolism throughout the country.

After the independence of Bangladesh, mass media repeats everyday such words as “independence”, “Freedom Fighters”, “1971” (the year of independence), or just “*ekāttar*” (71). On the other hand, people hails “Bengali nationalism”, and chants “*jay Bangla!*” (hail Bengal!), “*joy bango-bandhu!*” (hail “friend of Bengal”, a nick name of the hero of independence and the first prime minister Mujibur Rahman). But, what does “Bengal” mean in this context? Independence for whom? As a tentative conclusion, the emergence or re-emergence of a new identity of the Bangladeshi Muslims is suggested in Chapter III through the analysis of the “curious” events reported, of the condition of religious education, of the situation of everyday language, and of pictures or cartoons.